

LEADERS NOW!

空手道は人生そのもの

世界大会での更なる飛躍を胸に

●文学部 4年次生
清水 希容 さん

2020年東京五輪の追加種目として国際オリンピック委員会に提案された「空手道」。その大会組織委員会のヒアリングで伝統的な「形」の演武を披露した清水希容さんは、2014年ドイツで開催された世界選手権で初出場・初優勝の快挙を遂げ、続く全日本選手権では史上最年少で優勝。今年に入ってから、アジアシニア選手権、わかやま国体で優勝と、大躍進を続けている。清水さんの空手に懸ける想い、そして形の魅力とは——？

「イヤァー——ッ！」静まり返った凱風館の練習場に、凛とした声が響き渡る。気合の主は、昨年、世界空手道選手権大会女子形に日本代表として臨み、見事、金メダルを手にした清水さん。最高峰の戦いに勝利した感想を尋ねると「正直まだ実感は湧いていませんが、これからもっと上を目指して、自分の求めているものを磨いていきたいです」と目を輝かせた。

空手を始めたのは小学校3年生の時。兄について道場見学に行ったのがきっかけだ。所属する糸東流は、スピードと切れ味を重視する流派。空手の基本は形と組手であり、清水さんは形を究めたいと稽古に励んだ。形の演武は種類が多く、動きや順序が定められているが、同じ形を打つにしても、鍛錬を積めば積むほど味や良さが見え、深みが増す。

清水 希容——しみず きよう
■1993年大阪府生まれ。東大阪大学敬愛高等学校卒。文学部4年次生。体育会空手道部所属。9歳で糸東流養秀館本部道場に入門し、形競技で活躍を続ける。第22回世界空手道選手権大会に続き、第42回全日本空手道選手権大会、第13回アジアシニア空手道選手権大会で優勝するなど、数々の大会でメダルを獲得。



いくらでも探求できる限界の無さが魅力だという。「形は“動く芸術”であり、見せるもの。決まった形を打っても、その人の性格すべてが現れるんです。よく、私の個性は思い切りの良さだと言われるので、表現の中にそういう私らしさを見ていただき、何か響くものがあったらうれしいですね」。

そんな清水さんの一日は、練習に始まり練習で終わる。ほとんどの時間を道場か大学の練習場で過ごしているが、それでも時間は足りない。国際大会は形の数が多いため、練習量も通し稽古も更に増える。緩急の付け方や呼吸法、体重の乗せ方などの繊細な部分は日本人特有のもの。そこを伸ばし“心・技・体”を一致させるために、必死に練習しているという。「せっかく空手道部の仲間がご飯に誘ってくれても行く時間がなくて。でも皆、仲が良く、いつも応援してくれるのでありがたいです」。時間に追われつつもわずかな空き時間を見つけ、星を見たり空の写真を撮ったりと自然観賞を楽しむのが唯一のリフレッシュ法だ。

今は、来年の世界大会2連覇にすべてを懸けている。「2020年の東京オリンピック開催が話題に上ようになって以来、他国のレベルが上がってきたと感じます。怖いけれど、絶対に負けたくない」。元々、清水さんが世界大会を目指すようになったのは、2012年に優勝した糸東流の先輩、宇佐美里香さんの演武を目にしたから。「世界に懸けてきた強い想いを感じ、形はこんなにも経験を表現できるものなんだと感動しました」。宇佐美選手のような表現ができるよう、清水さんは目の前の大会に向けて、着実に準備を重ねる。「世界大会の先にオリンピックがあり、もしその時にチャンスをいただけたら全力を尽くしたい。オリンピックを通して子供達に夢を与えられたら良いなと思っていますし、オリンピックへの夢を広げられる選手になりたいです」。

清水さんにとって空手道とは？と問うと、「私の人生そのもの」と返ってきた。「空手道から多くの経験をさせてもらい、成長し、人間形成をしてきました。それは今までもこれからも変わりません。今後も空手道にしっかりと向き合いながら、進んでいきたいと思っています」。

目指すは“笑い”のエンターテイナー

脈々と受け継がれる人情喜劇

●松竹新喜劇 俳優
藤山 扇治郎 さん —文学部 2009年卒業—

喜劇役者・藤山扇治郎さんは、昭和の上方喜劇界を代表する役者・藤山寛美さんを祖父に、人気女優の藤山直美さんを伯母に持つ。さぞプレッシャーを感じるだろうと思いきや、「祖父は私が3歳の時に亡くなったので、ほとんど映像でしか知らないんです。もう、神様が歴史上の人物のような存在なので気負いはないですよ」とちやめつ気たっぴりにほほ笑む。

藤山 扇治郎——ふじやま せんじろう
■1987年京都市生まれ。2009年関西大学文学部卒。10年に上京し、劇団青年座研究所に入所。12年より青年座映画放送株式会社に所属。13年松竹新喜劇へ入団。父は小唄白扇流の家元、祖父は喜劇王と称された藤山寛美、伯母は藤山直美。幼少期より日舞や小唄に接し、舞台上で名子役ぶりを発揮。テレビドラマ等にも多数出演。

26歳で松竹新喜劇に入団し、祖父・藤山寛美さんが阿呆役として確固たる地位を築いた『お祭り提灯』の丁稚役でデビューした扇治郎さん。翌年には新橋演舞場での『朗らかな嘘』で主演を勤め、場内の爆笑を誘った注目の若手喜劇役者だ。

扇治郎さんが初舞台を踏んだのは、小学校1年生の時。東京・歌舞伎座で『怪談乳房覆』に出演し、以来、高校1年生まで子役として活躍した。大学への進学は、担任の先生から勧められたという。多面的な能力、意欲・熱意や個性を積極的に評価されるAO入試が関大にあるからだ。「自分がしてきたことを評価してもらえると嬉しい、受験を決めました」。偶然にも面接官が大の喜劇好きだったことで緊張は解け、子役時代の活動についてや将来は芝居をしたいという夢を語って合格を果たした。

大学での4年間は、友達に囲まれて思い切り自由を満喫した。また、奇遇なことは重なり、所属したゼミの大島薫教授も新喜劇のファンだった。「祖父の舞台をリアルタイムでご存知だったので、貴重な話をたくさん伺うことができました。祖父がいつまでも皆様の心に残っていることに、改めて感動しましたね。先生は私に新喜劇の舞台に立つよう勧め続けてくださったんですが、松竹新喜劇は“おばちゃんのみかん”とあめちゃんを持って観に行く”というイメージが強く、当時は魅かれなかったんです」。



新劇や“普通の”芝居を目指し、卒業後は青年座へ入るために上京。知り合いもいない中で初めての一人暮らしを経験した。その心細さを癒してくれたのが、何気なく持って来た祖父のDVD。「新喜劇の芝居は面白いだけじゃない。今の時代では希薄な、人とのつながりや人情が最も大切に扱われている！」そう気付いた時、急にその存在が大きくなった。「振り返ってみると、不思議ではないんです。私が新喜劇に入ることは元々決まっていたのかな、と。流れに乗るかのようにならなくなった扇治郎さんの目標はやはり寛美さんであり、子役時代に同じ舞台上に立たせて貰った十八世中村勘三郎さん(当時の勘九郎さん)だと言う。「お二人に共通するのは真のエンターテイナーであるという点。お客様を引きつけ楽しませる、その溢れるパワーに圧倒されるのです」。

来年元旦からは京都・四条南座での『初笑い 松竹新喜劇 新春お年玉公演』に出演予定。藤山寛美二十快笑の一つ『浪花の夢 宝の入船』では、石職人・堅田の源造役を担う。「祖父の芝居を継承すると考えると大層ですが、同じお役を演じさせていただけると、また、祖父と共に芝居をされてきた大先輩方に直接教えてもらえることが、本当に嬉しいです。まだまだ祖父の足元にも及びませんが、時々祖母が私の舞台を観て嬉しそうにほほ笑む、その瞬間が何よりも幸せです」。寛美さんの当り役を次々と演じる扇治郎さんから、ますます目が離せない。